

みるく世ぬなうらば世や直れ

6月23日は沖縄の慰霊の日だ。摩文仁の丘の平和記念公園では毎年その日に『沖縄全戦没者追悼式』が行われる。今年の式典の中で宮古島の中学生上原美春さんが自作の詩『みるく世の謳（平和の詩）』を朗読した。その中で引用された宮古民謡の一節が「みるく世ぬなうらば世や直れ」という言葉だ。宮古地方の方言で『平和な世がやってきて、みんなの暮らしが良くなりますように』という意味だという。

彼女は、自分の姪が誕生した際、「『おなかがすいたよ』／『オムツを替えて』と／力一杯、声の限りに訴える／大きな鳴き声をそっと抱き寄せられる今日は、／平和だと思う」と何気ないことから、今の平和のありがたさを感じた。戦時中、防空壕の中で人々は声を潜めて敵の襲来におびえ、泣くことさえ許されず、口をふさがれ亡くなっていった小さな命は少なくない。十分な栄養が行きわたらず、短い生涯を終えた小さな命も枚挙にいとまはない。

「6月を彩る月桃が揺蕩（たゆた）う／忘れないで、犠牲になっていい命など／あって良かったはずがない事を／忘れないで、壊すのは、簡単だということを／もろく、危うく、だから守るべき／この暮らしを／（中略）どうか忘れないで／生きることの喜び／あなたは生かされているのよと」

日本で唯一の地上戦が行われた沖縄で亡くなった20万人の方々を含めて、先の大戦で310万人以上の日本の方々が犠牲になられている。その方々の犠牲の上に今の平和があることを忘れてはならない。コロナ禍で当たり前のことが実は当たり前ではないということについて、私たちは身をもって体験しているが、この平和も当たり前ではない。生きていることも当たり前ではない。生かされているからこそ、掛け替えがなく大切なのだ。

この詩の最後には「生きとし生けるすべての尊い命のバトン／今、私たちの中にある／暗黒の過去を溶かすことなく／あの過ちに再び身を投じることなく／繋ぎ続けたい／みるく世を創るのはここにいるわたし達だ」という力強い意志で締めくくられている。本校は沖縄に修学旅行に行く機会が多い。「煌（きら）びやかなサンゴ礁の底に／深く沈められつつある／悲しみが存在することを」忘れてはならない。沖縄の空の青、海の青には、そんな深さがある。（「」内は『みるく世の謳（平和の詩）』より引用）

「生き方講演会」

6月23日、「月曜から夜ふかし」にも出演したことがある淡路麺業株式会社社長出雲文人様に来ていただいた。目標を手帳に記入して可視化することで「どの山に登るか」がはっきりする。「どの山に登るか」がはっきりすれば、「どの道を通って行くべきか」がはっきりしてくる。「人生は選択の積み重ね」であるが、そのことで目標に向かってブレずに挑戦を重ねていくことができるのだ。また、一所懸命取り組み、誰かが救いの手を差し伸べてくれること、素直になることの意味を教えていただいた。一旦地元を離れたからこそ、地元の良さを客観的に確認することができたということにも注目したい。いろんな人と出会い、いろんな経験をすることで、新たな目標が見つかるかもしれない。まだ出会っていない人・ものに会おうため、まだ見ぬ世界に飛び立とう。一度しかない限られた人生だから、We keep on challenging.

1学期期末考査

7月1日から1学期期末考査が始まる。期末考査に向けて、部活動も原則休止し、全力を尽くす環境は整えられた。そこでどう取り組んだのか。特に3年生にとっては、就職試験、推薦入試に向けての大きな関門と言っていだろう。限られた範囲の定期考査だ。戦略は立てやすいはずだ。

We keep on challenging. 挨拶日本一の高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩